

成人看護学（慢性期実践方法）における シミュレーション教育の取り組み

高橋奈津子¹⁾ 高田 幸江¹⁾ 松本 文奈¹⁾

The Approach of Simulation-Based Education in Adult Nursing (Chronic Illness and Conditions)

Natsuko TAKAHASHI, MSN, RN¹⁾ Yukie TAKADA, PhD, RN¹⁾
Ayana MATSUMOTO, MSN, RN¹⁾

[Abstract]

Due to changes in disease structure, there have been an increasing number of people under treatment for chronic health issues, and thus, the expectations of nurses for educational care have risen. However, with just lectures, it is difficult for nursing students to comprehend the circumstances of patients who have long been treated for chronic illness and their family members, and imagine the necessary educational care. In recent years, the method of “active learning” has been recommended in nursing education to promote a positive attitude in students toward learning. Thus, starting in the 2014 academic year, in adult nursing (chronic illness and condition) of our university, we have adopted role-playing about information gathering and educational care, for example, assuming a situation ten years hence to the conventional case study of diabetic patients.

At this time, we report on the outline of that role-playing practice and the future challenges.

[Key words] chronic illness, active learning, simulation-based education, role play

[要 旨]

疾病構造の変化により慢性的な健康問題を抱え療養している人が増加しており、看護師の教育的支援に対する期待が高まっている。しかし、看護学生にとって講義のみでは、慢性的な健康問題をもち長期に療養している患者・家族の状況を理解し、必要な教育的支援をイメージすることは難しい。近年、看護基礎教育において学生の能動的学びを促進するアクティブラーニングがすすめられている。そこで本学の成人看護学（慢性期実践方法）では、2014年度より従来の糖尿病患者の事例演習に加え、同事例の10年後を設定し、教育的支援のための情報収集及び教育の場面のロールプレイ演習を導入した。

今回、導入したロールプレイ演習の概要と今後の課題について報告する。

[キーワードズ] 慢性期看護, アクティブラーニング, シミュレーション教育, ロールプレイ

I. はじめに

医療の進展に伴い、看護職に求められる役割も多岐に

わたっている。その中でも疾病構造の変化により慢性的な健康問題を抱え療養している人が増加しており、看護職の教育的支援に対する期待が高まっている。慢性的な

1) 聖路加国際大学看護学部 専門領域 St. Luke's International University, Faculty of Nursing

健康問題をもつ患者・家族に対する教育的支援は、患者・家族の考えや思い、価値観を尊重しながら、その人のセルフケア能力や生活に合わせた教育内容を精選し実施する必要がある。また長期にわたって療養生活を継続していくため、看護職は、信頼関係形成につとめ、自己効力感を高めるようなコミュニケーションも求められる。しかし、看護学生にとって講義のみでは、慢性的な健康問題をもち長期に療養している患者・家族の状況を理解し、必要な教育的支援をイメージすることは難しい。また初学者である学生の多くは青年期にあり、学校・家庭生活で出会う人以外、多様な人とコミュニケーションをもつ機会も限られている。そこで、成人看護学（慢性期実践方法）では、2014年度より従来の糖尿病患者の事例演習に加え、同事例の10年後を設定し、教育的支援のための情報収集及び教育の場面のロールプレイ演習を導入した。ロールプレイ演習は、臨床でのあらゆる状況、患者の状態を学習者のレディネスに合わせて模擬的に再現した環境での体験型学習のシミュレーション教育¹⁾のひとつであり、今回導入したロールプレイ演習は、学生の能動的学び（アクティブラーニング）を促進し、成人看護学実習（慢性期）の準備教育につながると考えた。

今回、成人看護学（慢性期実践方法）で実施したロールプレイ演習の概要と今後の課題について報告する。

II. 成人看護学（慢性期実践方法）概要

成人看護学（慢性期実践方法）は、慢性・長期的な健康問題をもつ人・家族がセルフケア能力を高め、生活の変化と療養のバランスを保ちながら、その人にとって最適な健康状態になるような看護に関連する理論と方法を習得することを学修目的とし、3年次前期に3単位の必修科目として開講している。

本科目は講義、演習を組み合わせた授業形態をとっている。講義は、慢性的な健康問題をもつ人・家族の理解と支援に関する概念・理論を学ぶ慢性期看護概論と生活習慣の継続的な調整をしている人、機器により生命を維持している人、消耗・進行性の病状を調整している人、生活の再構築が必要な人、がんとともに生きている人を学ぶ各論で構成されている。

演習は、従来からの糖尿病患者を事例とし、看護過程を展開する演習1と、2014年度より糖尿病患者の教育的支援に関するロールプレイを実施する演習2で構成されている。

III. 演習2（ロールプレイ演習）について

1. 演習2の導入の経緯

成人看護学実習（慢性期）では、慢性・長期的問題を

もつ患者を対象に2013年度より病棟実習と外来実習を組み合わせた実習形態をとっており、学生が患者及び家族に対する教育的支援の一部を担う機会が増えることが予想された。実際、外来実習では、社会生活を送りながら疾病・治療に伴う症状や障害に対するセルフマネジメントが求められている患者を受け持つことが多く、患者のセルフマネジメント状況や症状、治療に伴う影響の情報収集や、指導場面の見学や学生による指導実施の機会が増加していた。そのため教育的支援の学習においてより実践に近づけた学習環境下で学ぶことのできるロールプレイ演習を導入することが実習の準備教育としても必要ではないかと考えた。

また学生にとって、病いとともに生きているひとの長期にわたる療養生活をイメージすることは難しい。慢性・長期的な健康問題をもつ人・家族への看護を実践するためには、どのような病みの軌跡をたどり現在にいたっているのか、また今後どのような軌跡をたどっていくのかという長期的視野をもって関わることが求められる。そのため、演習2では、演習1の糖尿病患者の事例演習で登場したAさんの10年後を設定した。演習1では、Aさん（50歳・男性）は糖尿病の教育入院で薬物療法が開始される予定の事例であったが、演習2で取り上げる10年後のAさんは、加齢とともに食事・運動療法、内服治療では血糖コントロールが難しくなり、インスリン注射が導入されることになるという状況設定にした。2014年度には、インスリン注射導入前に、外来でAさんに出会う場面とし、インスリン注射が自分で行えるかどうかをアセスメントする場面のロールプレイ（演習2①）を導入した。実際の看護場面では、アセスメントと教育がリンクしながら同時に実践されているため、アセスメントのみでなく教育の実施場面まで導入する必要があると考え、2015年度にはインスリン導入後のAさんに対し、低血糖に関する教育を実施する場面のロールプレイ（演習2②）も加えた。

2. 演習2の目的と具体的目標とスケジュール

演習2の演習目的は、慢性的な健康問題をもち、長期に療養生活を継続していた人への教育的支援において重視すべきことについて理解を深めることとした。

具体的目標は以下の5点とした。

- ① Aさん（2型糖尿病にてインスリン自己注射導入予定：事例演習Aさんの10年後）が、インスリン自己注射を自分で実施できるかどうか判断するための情報収集（巧緻性・視力、理解力など）の内容、注意点を考えることができる。
- ② 事例の内容から、インスリン自己注射導入前のAさんの身体状態、心理状態、社会背景を理解し、これまでの長期の療養生活と今後を推測し、教育的支援にむけ

た情報収集のコミュニケーションにいかすことができる。

- ③グループ内で検討し、教育入院後の初回外来受診の A さんに対し、低血糖に関する教育的支援において確認すべき内容と追加指導の内容・方法について考えることができる。
- ④ロールプレイに主体的に参加し、ロールプレイでの気づき、学びをディスカッションで共有できるようグループメンバーとしての役割を果たす。
- ⑤ロールプレイを実施しての気づき及び PCC 概念や A さんの強みをいかし、慢性的な健康問題を持ち、長期に療養生活を継続していた人への教育的支援において重視すべきことについて理解を深め、文献を活用しレポートとしてまとめることができる。

演習 2 は、学生全体を A グループ、B グループに分けて、事前準備や自己学習の時間の確保の考慮し、資料 1 のようなスケジュールで実施した。さらに A グループ、B グループを 6 グループに分け、教員 3 名、TA 3 名の計 6 名で対応した。

資料 1 演習 2 のスケジュール

日時	内容と進め方		方法
	A グループ	B グループ	
6月8日(月) 3限	講義+演習オリエンテーション		全体
	ロールプレイの準備		グループワーク準備
6月15日(月) 3限	演習 2① ロールプレイ①	予・復習	A:グループワーク B:自己学習
6月19日(金) 4限	予・復習	演習 2① ロールプレイ①	A:自己学習 B:グループワーク
7月6日(月) 3限	演習 2② ロールプレイ②	予・復習	A:グループワーク B:自己学習
7月10日(金) 4限	予・復習	演習 2② ロールプレイ②	A:自己学習 B:グループワーク
7月24日(金)	まとめ		全体

またインスリン自己注射の実際を知ることと毎日実施することになる A さんの心理を擬似体験し、ロールプレイにいかすことを目的に練習用のインスリン自己注射のデモンストレーション機と腹部モデルを演習オリエンテーション時から演習 2②の終了時期まで、実習支援員の在室時に実習室で自己学習できるように準備した。これは自主的な参加であったが、約 4 分の 3 の学生が自己学習に来ており、能動的な学びがみられた。

3. 演習 2①の実際

1) 演習 2①の事前課題

演習 2①の事前課題として、A さんが、インスリン自己注射が自分で実施できるかどうか判断するための情報収集の内容、注意点について教育的支援にむけた情報収集準備シートに記載することとした。また事例の内容か

らインスリン自己注射導入前の A さんの身体状態、心理状態、社会背景を把握し、これまでの長期の療養生活と今後の生活を推測することも課題とした。

2) 演習 2①の内容

インスリン自己注射導入予定の A さんに対し、自己注射を自分で実施できるかどうか判断するための情報収集(巧緻性・視力、理解力など)の場面(資料 2)をロールプレイした。その際、A さんの身体状態、心理状態、社会背景を理解し、これまでの長期の療養生活と今後を推測しながら関わるよう促した。

資料 2 演習 2①の場面

【場面】インスリン自己注射導入のため、教育入院が予定されている A さんに対し、セルフケアに向けた課題を自分でできるかどうかを確認する場面
あなたは、看護学生です。成人看護学実習(慢性期)の外来演習で、A さん(2型糖尿病)を担当することになりました。 A さんは、60歳で、11年前に糖尿病と診断され、食事、運動、内服治療を行っていましたが、血糖コントロールが不良になり、来週、インスリン導入目的で教育入院の予定になっていると指導者さんに聞きました。指導者さんは「実際の自己注射の指導は、入院してからになるけど…実際、ご自分でできるかどうか確認しないとね」と言いました。 指導者さんから紹介され、あいさつしたところで、指導者さんは仕事にもどりました。 「少し、お話をうかがってもいいですか」と A さんに言うと、「なんでも聞いていいよ。それにしても、いよいよインスリンをつかわなきゃいけないんだよ…」と言いました。

☆指導者さんから紹介され、あいさつするところからロールプレイをはじめてください。

3) 演習 2①の進め方

演習 2①準備時に A さん役、看護学生役、順番を決めておき、演習 2①の時間内で、A さん役、看護学生役のいずれかを全員が体験できるようにした。ロールプレイの時間は 5 分とし、ロールプレイ後に役割毎に、感じたこと、気づいたことなどフィードバックの時間(5 分)をとった。全員が、A さん役、看護学生役のいずれかを体験したあと、グループで慢性的な健康問題を持ち長期に療養している人に対する教育的支援における情報収集に関するコミュニケーションで気づいたこと、学び、重視すべきことについてディスカッションを行った。(20 分程度)

教員の関わりとして、実際の教育的支援では、看護師が情報収集と同時に教育を実施し、反応を見ながらさらに教育をすすめる場合が多いが、演習 2①では、あくまで情報収集・アセスメントするところまでを目的としているので、看護学生役が、勝手に指導・教育をしてしまっている場合(特にインスリン注射に関すること)は、看護学生としての立場では、指導内容や方法が本当に患者にとって適しているのかについて看護師の確認と指導を受けた上で実施することが望ましいことをフィードバックするようにした。また看護学生役はどのようなことに配慮、注意しながら、意図的に情報収集しようとしたか、

コミュニケーションの過程で患者の反応から学んだことなど、患者役は、長期に療養生活を継続し、現在の状況に至っている過程や今後についてどのように理解し、演じたのか、看護学生役とのやりとりで感じたこと、がんばろうと思えた態度や言葉かけ、逆にやる気や自信を失った場面など患者の気持ちになりきって感じたこと、観察者役は、観察者の視点で気づいたことなどについて確認、共有できるようにした。

4. 演習2②の実際

1) 演習2②の事前課題

教育計画用紙を演習1で立案した計画を参考にしながら、グループで1枚、演習2②の実施日までに作成しておくこととした。

2) 演習2②の内容

教育入院後の初回外来受診のAさんに対し低血糖症状の確認と追加指導の場面（資料3）をロールプレイした。

資料3 演習2②の内容

<p>【場面】教育入院後の初回外来受診 低血糖症状についての確認の場面</p> <p>あなたは、看護学生です。成人看護学実習（慢性期）の外来演習で、教育入院の退院後、初めて外来受診にくる予定のAさん（2型糖尿病）を担当することになりました。</p> <p>指導者さんが、「自己注射の手技の確認は、私がするので一緒に見学してください。その後、退院後の生活についてお聞きしながら、低血糖のことについて確認しないとイケないですね。私もいるので勉強したことをもとに低血糖に関する確認と必要な追加の指導をすすめてみてください」と言いました。</p> <p>指導者さんと自己注射の手技を確認しました。手技は問題なくできていました。そこで指導者さんが「退院後の生活について、学生に少しお話ししていただけますか？」とAさんに言いました。</p> <p>「いいですよ。なんでも聞いてください」とAさんは言いました。</p>
--

☆手技の確認後の場面から、ロールプレイをはじめてください。

3) 演習2②の進め方

グループ内で事前に演習2②のAさん役、看護学生役を1名ずつ決めてもらった。2グループをペアグループとし、他グループのAさん役に教育する場面のロールプレイを行い、フィードバック後、2回目のロールプレイ、フィードバックを実施した。ロールプレイの時間は1回10分とし、ロールプレイ後にAさん役、看護学生役、観察役が感じたこと、気づいたことをフィードバック（15分）した。各グループで、教育的支援の内容、方法、関わり方などを振り返り、教育的支援において重視すべきことについて司会、書記を決め、ディスカッションをした。（30分程度）

教員の関わりとして、看護学生役、Aさん役の学生には、グループの代表としてロールプレイをするため、うまくできなくてもかまわないことを伝え、できるだけ緊張緩和できるようにした。緊張などでロールプレイが続かなくなる場合は、様子を見て一旦とめ、看護学生役、Aさん役がグループメンバーと相談できる時間や、考え

る時間を作るようにした。また演習2②では、低血糖に関する教育的支援において確認すべき内容と追加指導の内容・方法について考えることを目的としているが、導入としての会話についてもどんなことに注意したのかディスカッションで意見がでるように促した。学生たちは、話しやすい雰囲気づくりをつくること、低血糖症状やその対処について、Aさんのこれまでの知識ややり方を尊重しながら確認し、具体的な対処方法を提案したり、Aさん自身が自分で気づき、考えられるような関わりが重要なことなどを学ぶことができていた。

5. 演習2の振り返りとまとめ

成人看護学（慢性期実践方法）の授業の最終日に演習2の振り返りとまとめの時間を設けた。インスリン自己注射の導入に伴い、巧緻性や視力、理解力をどのように情報収集するか例をあげ、日常生活で想定できそうなこと、実物に似たもので確認すると分かりやすいことを伝えた。また10年間の療養生活での身体状態や心理状態、社会背景の確認も行った。特に子供も自立し孫も誕生すること、妻と第2の人生を楽しみたいという情報をどのようにとらえ教育的支援にいかすことができるか考えを促した。また基本的なコミュニケーション技法や教育方法・内容、継続していくための支援についての説明も補足した。

IV. まとめ

成人看護学（慢性期実践方法）で導入したロールプレイ演習の概要について報告した。今回のロールプレイ演習は、学生同士のロールプレイ演習であり、学生がAさんの10年後を想定して患者体験をすることや、他の学生のロールプレイを観察することで教育的支援におけるコミュニケーションについて考える機会となっていた。反面、学生のみでは、10年間の療養生活の複雑な様相を再現することの限界もあると思われた。今回の演習の学びと実習における有効性を検討するとともに、糖尿病患者以外の事例の作成、模擬患者の導入なども検討していきたい。

引用文献

1) 阿部幸江. (2013). 臨床実践力を育てる！看護のためのシミュレーション教育. 医学書院.

参考文献

1) クリシヤ・M・ヤルドレイ＝マトヴェイチュク. (2011). ロールプレイ 理論と実践. 和泉浩監訳. 現代人文社.